

博士論文（要約）

論文題目 〈生殖と男性〉の社会学
——ジェンダー理論における平等論・再考

氏名 齋藤 圭介

【目次】

序 「〈生殖と男性〉の社会学」の問題意識とその射程	5
(1) 大きな問題関心.....	6
(2) 本論の対象	7
(3) 本稿の問題関心が有する射程と本稿の構成.....	11
【第1部】 なぜ〈生殖と男性〉の社会学なのか——問題提起.....	17
1章 問題の所在と本論の目的——〈生殖と男性〉を問うことの社会的意義.....	18
1.1 問題の所在——なぜ生殖と男性なのか.....	18
1.1.1 何が論じられてきたのか.....	18
1.1.2 何が論じ残されており、それをどのように論じればよいのか.....	22
1.1.3 reproduction, procreation, generate——生殖をいかに定義するか.....	24
1.1.4 再生産コストの分配問題.....	28
1.2 生殖論の周辺——本稿で扱わない論点.....	29
1.2.1 生殖補助医療と生殖.....	31
1.2.2 クイア・スタディーズと生殖論.....	33
1.3 小括——本章の問題提起.....	35
2章 生殖とフェミニズム思想の周辺	36
2.1 フェミニズム思想の生殖論を構成する軸——家父長制と自己決定権.....	36
2.1.1 家父長制概念の整理.....	36
2.1.2 家父長制概念の実際.....	39
2.2 家父長制と自己決定権.....	40
2.2.1 フェミニズム思想内の自己決定権.....	40
2.2.2 自己決定権と中絶.....	42
2.2.2.1 自己決定権の2つの水準.....	42
2.2.2.2 生命倫理と生殖論.....	44
2.3 フェミニズム思想による生殖論の主流——生殖論の第Ⅱの段階.....	50
2.4 小括——生殖における男女の関係.....	55
【第2部】 生殖と男性学	58
3章 生殖の実態——生殖と男性の視点から	59
3.1 男性の立場から生殖を問うことの必然性.....	59
3.1.1 なぜ男性は生殖を論じにくいのか.....	59
3.1.2 なぜ男性が生殖を論じる必要があるのか——ケアの社会化論を回避する理由.....	60
3.1.3 男性と生殖の問題は、いかなる意味で社会的関心と重なるのか.....	62
3.2 日本の文脈における生殖と男性.....	63

3.2.1	Iの段階：避妊と男性——「市民道徳」としての避妊	63
3.2.2	IIの段階：中絶の現状——日本の中絶の概況	67
3.2.3	IIIの段階：養育と男性	69
3.2.3.1	父親の養育費未払い問題	70
3.2.3.2	父親の子育てという論点	71
3.3	小括——男性は生殖を語れるのか	72
4章	男性学と生殖	73
4.1	当事者主義・再考——生殖の当事者とは誰か	73
4.1.1	〈当事者である〉とはいかなることか	73
4.1.2	男性学から生殖を語る方向性	77
4.1.2.1	男性学・女性学と当事者性	77
4.1.2.2	男性がフェミニズムを語ることについて——他者の問題を語りうるか	77
4.1.2.3	フェミニズムを通過しない男性学は可能か	78
4.2	生殖の当事者の1人としての男性を位置付ける男性学の試み	80
4.2.1	男性学者の試み	81
4.2.1.1	パートナーの女性との関係で倫理に訴える	82
4.2.1.2	胎児との関係で男性倫理と訴える	85
4.2.1.3	男性学はいかに生殖を論じられるのか	86
4.2.2	個人の倫理を語る男性学論者への批判	90
4.3	小括	96
	【第3部】生殖における平等をめぐる理論的考察	98
(1)	第3部の構成と議論の要点	99
(2)	第3部の議論の要点	100
5章	男女平等を規範的に考える——社会契約としての平等観	103
5.1	現在の平等論の位相——J. Rawls『正義論』を中心に	103
5.1.1	Rawls『正義論』の主張	103
5.1.2	Rawls『正義論』の要点	104
5.1.2.1	原初状態と無知のヴェール	106
5.1.2.2	正義の二原理	109
5.1.2.3	社会的基本財の分配	111
5.1.3	『正義論』と『政治的リベラリズム』の異同	113
5.2	コミュニタリアニズムとの対立軸——『リベラル・コミュニタリアン論争』の論点	117
5.2.1.1	人格の構想	118
5.2.1.2	非社会的個人主義	120
5.2.1.3	普遍主義	121

5.2.1.4	主観主義か客観主義か.....	121
5.2.1.5	反完成主義と中立性.....	122
6章	フェミニズム思想の規範理論.....	124
6.1	フェミニストたちは Rawls をいかに解釈したのか.....	124
6.1.1	本章の構成.....	124
6.1.2	Rawls の議論とフェミニズムの批判をどう整理するべきか.....	125
6.2	『正義論』への応答.....	127
6.3	『政治的リベラリズム』への反応.....	135
7章	ケアをめぐる論点.....	142
7.1	ケアとは何か.....	143
7.1.1	ケアの倫理.....	145
7.1.2	〈ケア〉の概念史——Reich (1995=2007) の「ケア概念の歴史」.....	146
7.1.3	M. Mayeroff 『ケアの本質』.....	147
7.2	Gilligan 『もう1つの声』.....	149
7.2.1	Gilligan の『もう1つの声』の議論.....	150
7.2.2	Kohlberg の道徳発達観.....	151
7.2.3	Gilligan の主張.....	153
7.2.3.1	〈ハインツのジレンマ〉の Gilligan による解釈.....	153
7.2.3.2	Jake と Amy の対立は、いかに普遍化できるのか.....	156
8章	規範理論としてのフェミニズムにおけるケアの諸相.....	159
8.1	『もう1つの声』のインパクトとその反応.....	159
8.1.1	Gilligan 以降.....	159
8.1.2	Rawls とケアの倫理.....	161
8.2	ケア倫理学者の世代整理——第1世代のケアの理論家たち.....	164
8.3	正義とケアの同化の立場.....	168
8.4	ケアの第2世代.....	173
8.4.1	文脈への着目.....	175
8.4.2	応答への注目.....	175
8.4.3	選択の結果.....	176
8.5	小括.....	176
9章	社会構想の指針としてのケア論——ケア論の先鋭化.....	178
9.1	M. Fineman の立論とその射程.....	180
9.1.1	差異を前提とした平等論の構築.....	181
9.1.2	父親の権利についての言説の3類型.....	182
9.1.3	ケアの絆——自律神話を越えて.....	183
9.2	依存批判という視点.....	191

9.2.2	依存批判という主題が位置付けられる文脈.....	192
9.2.2.1	秩序だった社会のための正義の環境.....	195
9.2.2.2	「すべての市民は十分に協働しうる構成員」という理念化.....	196
9.2.2.3	自由な人格とは「正当な要求を自ら生み出す者」である.....	197
9.2.2.4	道徳的人格がもつ2つの能力と基本財のリスト.....	199
9.2.2.5	社会的協働という公共的構想.....	200
9.2.3	Kittay の結論——正義の原理と依存への関心.....	202
9.3	Kittay と Rawls の妥協点の模索——Bhandary の評価.....	204
9.3.1	Rawls の政治的リベラリズムは Kittay の依存批判に適応可能か.....	205
9.3.2.1	第3の道徳能力の否定.....	207
9.3.2.2	原初状態の代表制への批判.....	207
9.3.2.3	互惠主義への批判.....	208
9.3.2.4	6番目の基本財への批判.....	208
9.3.2.5	完全な依存者を含む政治理論の検討.....	210
9.3.2	Bhandary による結論.....	211
10章	ケアを社会化する理論的根拠とその戦略——生殖と男性問題との接続.....	213
10.1	何を議論してきたのか.....	213
10.2	ケアの社会化の含意と〈生殖と男性〉問題の接点.....	214
10.2.1	フェミニズムのケアの社会化論の提出した知見.....	214
10.2.2	なぜ生殖に男性をくみいれるべきなのか.....	215
10.2.3	「男性はいかなる意味で当事者なのか」を問うことの政治性.....	218
10.3	結論に代えて——本稿の課題と今後の展望.....	222
	【文献】	225

【本文】

5年以内に出版予定

【文献】

- Abbey, Ruth ed., 2013, *Feminist Interpretations of John Rawls*, The Pennsylvania State University.
- 赤川学, 1999, 『セクシュアリティの歴史社会学』 勁草書房.
- 赤川学, 2004, 『子どもが減って何が悪いか!』 筑摩書房.
- 赤川学, 2006, 『構築主義を再構築する』 勁草書房.
- 赤川学, 2011, 『社会学問題の社会学』 弘文堂.
- 赤川学, 2017, 『これが答えだ! 少子化問題』 ちくま新書.
- 秋山洋子, 1993, 『リブ私史ノート——女たちの時代から』 インパクト出版会.
- 秋吉久美子, 1983, 『勝手にさせて』 三一書房.
- Anderson and Honneth, 2005, “Introduction,” Christman and Joel Anderson eds., *Autonomy and the Challenges to Liberalism: New Essays*, New York: Cambridge University Press, 1-26.
- Anne-Marie de., V, et al. eds., 1986, *Maternite en mouvement: les femmes, la re/production et les Hommes de science*, Presses Universitaires de Grenoble. (=1995, 中嶋公子・目崎光子・磯本輝子・横地良子・宮本由美・菊地有子訳『フェミニズムから見た母性』 勁草書房.)
- 青木やよひ, 1986, 『エコロジーとフェミニズム』 新評論.
- 有賀美和子, 1999, 『現代フェミニズム理論の地平——ジェンダー関係・公正・差異』 新曜社.
- 有賀美和子, 2011, 『フェミニズム正義論——ケアの絆をつむぐために』 勁草書房.
- Audard, Catherine, 2007, *Philosophy Now: John Rawls, Montreal*, McGill-Queen’s University Press.
- Baehr, Amy, 1996, “Toward a New Feminist Liberalism: Okin, Rawls, and Habermas,” *Hypatia*, 11(1): 49-66.
- Baier, Annette C., 1994, *Moral Prejudices*, Cambridge: Harvard university Press.
- Baker, Robin, 1999, *Sex in the Future: Ancient Urges Meet Future Technology*, London: The Susijn Agency. (=2000, 村上彩訳『セックス・イン・ザ・フューチャー』 紀伊國屋書店.)
- Baumli F. ed., 1989, *Men Freeing Men: Exploding the Myth of the Rraditional Male 3ed*, New Atlantis. (=1991, 下村満子訳『正しいオトコのやり方』 学陽社.)
- Becker, G., 1960. “An Economic Analysis of Fertility” in *Demographic and Economic Change in Developed Countries*, Universities-National Bureau Conference Series 11. Princeton University Press, Princeton.
- Benhabib, Seyla, 1987, “The generalized and the concrete other,” E. Kittay and D. Meyers ed., *Women and Moral Theory*, Rowman and Littlefield, 154-77. (=1997, 竹内真澄訳「一般化

- された他者と具体的な他者——コールバーグ—Gilligan 論争と道徳理論」マーティン・ジェイ編『ハーバーマスとアメリカ・フランクフルト学派』青木書店.)
- Benhabib, S., 1992, *Situating the Self, Gender, Community, and Postmodernism in Contemporary Ethics*, New York, London: Routledge.
- Blake, J., 1968. 'Are babies consumer durables? A critique of the economic theory of reproductive motivation', *Population Studies* 22: 103–150.
- Bly R., 1991, *Iron Jhon*, Element Books Lt. (=1996, 野中ともよ訳『アイアン・ジョンの魂』集英社.)
- Bhandary, Asha, 2010, “Dependency in Justice: Can Rawlsian Liberalism Accommodate Kittay’s Dependency Critique?” *Hypatia*, 25(1): 140-56.
- Bojer, hilda, 2000, “Children and Theories of Social Justice,” *Feminist Economics*, 6(2): 23-39.
- Brody, Baruch, 1972, "Thomson on Abortion," *Philosophy & Public Affairs*, 1(3): 335-40.
- Bubeck, Diemut Elisabet, 1995, *Care, Gender, and Justice*, Clarendon Press.
- Butler J.P., 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Rutledge. (=1999, 竹村和子訳『ジェンダートラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.)
- Chandran, Kukathas and Philip Pettit, 1990, *Rawls: A Theory of Justice and its Critics*, Stanford University Press. (=1996, 山田八千子・嶋津格訳『Rawls『正義論』とその批判者たち』勁草書房.)
- Chodorow, N., 1978, *The Reproduction of Mothering*, University of California Pres. (=1981, 大塚光子・大内菅子訳『母親業の再生産——性差別の心理・社会的基盤』新曜社.)
- Clement, Grace, 1996, *Care, Autonomy, and Justice: Feminism and the Ethic of Care*, Westview Press.
- Cornell, Drucilla, 1995, *The Imaginary Domain: Abortion, Pornography and Sexual Harassment*, New York and London: Routledge. (=2006, 仲正昌樹監訳『イマジナリーな領域——中絶, ポルノグラフィ, セクシュアル・ハラスメント』御茶の水書房.)
- Connell R.W., 1987, *Gender and Power: Society the Person and Sexual Politics* Polity Press. (=1993, 森重男・菊池栄治・加藤隆雄・越智康詞訳『ジェンダーと権力——セクシュアリティの社会学』三交社.)
- Connell R.W., 1995, *Masculinities*, Polity Press.
- Dalla Costa, M. and James, S., 1972, *The Power of Women and the Subversion of the Community*. London: Falling Wall Press. (=1986, 伊田久美子・伊藤公雄訳『家事労働に賃金を』インパクト出版.)
- 土場学, 1998, 「ジェンダー研究と解放のパラダイム」『社会学評論』, 49(2): 132-47.
- 土場学・盛山和夫編, 2006, 『正義の論理——公共的価値の規範的社会理論』勁草書房.
- Duden, Barbara, 1991, *Der Frauenleib als oefentlicher Ort*, Luchterhand. (=1993, 田村雲供訳『胎児へのまなざし——生命イデオロギーを読み解く』阿吽社.)

- Dworkin, R., 1977, *Taking Rights Seriously*, Cambridge, ML: Harvard University Press. (=2003, 木下毅訳『権利論 [増補版]』木鐸社.)
- 江口聡, 2008, 「森岡正博「膣内射精暴力論の射程」へのコメント——問題は性的同意では？」
<http://melisande.cs.kyoto-wu.ac.jp/eguchi/papers/morioka200806.pdf>
- 江原由美子, 1985, 『女性解放という思想』勁草書房.
- 江原由美子, 1995, 『装置としての性支配』勁草書房.
- 江原由美子, 2001, 『ジェンダー秩序』勁草書房.
- 江原由美子, [2002] 2012, 『自己決定権とジェンダー』岩波書店.
- 江原由美子, 2002, 「生殖 reproduction」井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納美紀代『岩波 女性学辞典』岩波書店, 274.
- 江原由美子ほか編, 1990, 『フェミニズム論争——70年代から90年代へ』勁草書房.
- 江原由美子編, 1996, 『生殖技術とジェンダー——フェミニズムの主張3』勁草書房.
- 江原由美子ほか編, 2001, 『フェミニズムとリベラリズム』勁草書房.
- 江原由美子編 2002 『生殖技術とジェンダー』(フェミニズムの主張3) 勁草書房.
- 江原由美子・金井淑子, 1997, 『ワードマップ フェミニズム』新曜社.
- Engels, Friedrich, 1891, *Der Ursprung der Familie, Des Pricateigentums und des Staats: Im Anschluss an Lewis H. Morgan's Forschungen*. (=1965, 戸原四郎訳『家族・私有財産・国家の起源』岩波文庫.)
- English, Jane, 1975, "Abortion and the Concept of a Person," *Canadian Journal of Philosophy*, 5(2).
- English, Jane, 1977, "Justice Between Generations," *Philosophical Studies*, 31(2): 91-104.
- Engster, Daniel, 2007, *The Heart of Justice: Care Ethics and Political Theory*, Oxford University Press.
- Exdell, J., 1994, "Feminism, Fundamentalism, and Liberal Legitimacy," *Canadian Journal of Philosophy*, 24(3): 441-63.
- Faludi, S. 1991, *Backlash: the Undeclared War Against American Women*, Doubleday. (=1994 伊藤由紀子・加藤真樹子部分訳『バックラッシュ——逆襲される女たち』新潮社.)
- Finema, Marthea A., 1995, *The Neutered Mother, the Sexual Family and Other Twentieth Century Tragedies*, Routledge. (=2003, 上野千鶴子監訳, 速水葉子・穂田信子訳『家族積みすぎた方舟——ポスト平等主義のフェミニズム法理論』学陽書房.)
- Fineman, M.A., 2002, "Masking Dependency: The Political Role of Family Rhetoric," E. Kittay and E. Feder eds., *The Subject of Care: Feminist perspectives on Dependency*, New York: Rowman & Littlefield Publishers.
- Fineman, M.A., 2004, *The Autonomy Myth: A Theory of Dependency*, New York: The New Press. (=2009, 穂田信子・速水葉子訳『ケアの絆——自律神話を超えて』岩波書店.)
- Finnis, John, 1973, "The Rights and Wrongs of Abortion," *Philosophy & Public Affairs*, 2(2).
- Firestone, Shulamith, 1970, *The Dialectic of Sex*, William Morrow & Company Inc. (=1972, 林弘

子訳『性の弁証法』評論社.)

- Frase, N., 1997, *Justice Interruptus: Critical Reflections on the "Postsocialist" Condition*, London: Routledge and Kegan Paul. (=2003, 仲正昌樹監訳『中断された正義——「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』御茶の水書房.)
- Frazer, Elizabeth and Lacey, Nicola, 1993, *The Politics of Community: A Feminist Critique of the Liberal-Communitarian Debate*, University of Toronto Press.
- Gilligan, C., 1982, *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Harvard University Press. (=1986, 岩男寿美子監訳『もう1つの声——男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店.)
- Gilligan, C., 1995, "Hearing the Difference: Theorizing Connection," *Hypatia*, 10(2): 120-7.
- Goldberg H., 1976(10th Anniversary Edition1987), *The Hazards of Being Male: Surviving the Myth of Masculine Privilege*, New York: Penguin Books. (=1982, 下村満子訳『男が崩壊する』PHP.)
- Goodin, Robert E, 1985, *Protecting the Vulnerable: A Reanalysis of Our Social Responsibilities*, The University of Chicago Press.
- Gosden, Roger., 2000, *Designing Babies: The Brave New World of Reproductive Technology*, W H Freeman & Co. (=2002, 堤理華訳『デザイナー・ベビー——生殖技術はどこまで行くのか』原書房.)
- Green, Karen, 1986, "Rawls, Women, and the Priority of Liberty," *Australasian Journal of Philosophy*, 64(supplement): 26-36.
- Harding, Sandra, 1982, "Is Gender a Variable in Conceptions of Rationality? A Survey of Issues," *Dialectica*, 36(2): 225-42.
- Harding, Sandra, 1987, "The Curious Coincidence of Feminine and African Moralities," Kittay and Meyers ed., *Women and Moral Theory*, Rowman and Littlefield, Savage, Md, 296-316.
- Hartman, Heidi, 1981, "The unhappy marriage of Marxism and feminism: towards a more progressive union," Lydia Sergent ed., *Women and Revolution*, London: Pluto Press, 1-42.
- Hankivsky, Olena, 2004, *Social Policy and the Ethic of Care*, UBS Press.
- Hare, R. M., 1975, "Abortion and the Golden Rule," *Philosophy & Public Affairs*, 4(3).
- 遥洋子, 2000, 『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』筑摩書房.
- 林道義, 1996, 『父性の復権』中公新書.
- 林道義, 1999, 『フェミニズムの害毒』草思社.
- Held, Virginia, 1987, "Feminism and Moral Theory," Eva Feder Kittay and Diana T. Meyers, ed., *Women and Moral Theory*, Totowa, NJ: Rowman and Littlefield, 111-28.
- Held, Virginia, 1993, *Feminist Morality: Transforming Culture, Society and Politics*, Chicago: University of Chicago Press.
- Held, Virginia, 1995, "The Meshing of Care and Justice," *Hypatia*, 10(2): 128-132.

- Held, Virginia, 2006, *The Ethics of Care: Personal, Political, and Global*, Oxford University Press.
- Held, Virginia, ed., 1995, *Justice and Care: Essential Readings in Feminist Ethics*, Westview Press.
- Hermann, Martina, 2008, "Fürsorge/Fürsorgeethik," Stefan Gosepath et al (Hrsg.), 平井亮輔・若松良樹・服部高宏・那須耕介, 2004, 『正義——現代社会の公共哲学を求めて』 嵯峨野書院.
- Hirshman, Linda R., 1994, "Is the Original Position Inherently Male-Superior?" *Columbia Law Review*, 94(6): 1860-81.
- Hochschild, R. A., 1983, *The managed heart: commercialization of human feeling*, Berkeley: University of California. (=2000, 石川准・室伏亜希訳『管理される心——感情が商品になるとき』世界思想社.
- 藤目ゆき, [1997] 2005, 『性の歴史学』不二出版.
- 福島瑞穂・中野理恵, 1990, 『買う男・買わない男』パンドラ編現代書館.
- Hursthouse, Rosalind, 1991, "Virtue Theory and Abortion," *Philosophy & Public Affairs*, 20.
- ヒュギーヌス (松田治・青山照男訳), 2005, 『ギリシア神話集』講談社学術文庫, 277
- 市野川容考, 1996, 「性と生殖をめぐる政治」江原由美子編『生殖技術とジェンダー』勁草書房.
- 伊田広行, 1998a, 『シングル単位の社会論——ジェンダーフリーな社会へ』世界思想社.
- 伊田広行 1988b『シングル単位の恋愛・家族論——ジェンダーフリーな関係へ』世界思想社.
- 池田弘乃, 2011, 「ケア(資源)の分配——ケアを「はかる」ということ」齋藤純一『支える——連帯と再分配の政治学(政治の発見③)』風行社.
- 育児連 男も女も育児時間を!連絡会編, 1989, 『男と女で(半分こ)イズム——主夫でもなく, 主婦でもなく』学陽書房.
- 居永正宏, 2015, 「フェミニスト現象学における「産み」をめぐる——男性学的「産み」論の可能性」『女性学研究』22: 99-126.
- 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代, 2002, 『岩波 女性学辞典』岩波書店.
- 井上未来・大東貢生, 2006, 「男性運動グループの活動と課題(2) 中間報告」『仏大社会学』(31): 76-80.
- 井上章一・森岡正博, 1995, 『男は世界を救えるか』筑摩書房.
- 井上達夫, 1996, 「人間・生命・倫理」江原由美子編『生殖技術とジェンダー』勁草書房.
- 井上達夫, 1986, 『共生の作法——会話としての正義』創文社.
- 井上達夫, 1999, 『他者への自由——公共性の哲学としてのリベラリズム』創文社.
- 井上達夫, 2003, 「フェミニズムとリベラリズム——公私二元論批判をめぐる」『ジュリスト』(1237): 29-33.
- 井上輝子 1980『女性学とその周辺』勁草書房.
- 井上輝子, 上野千鶴子, 江原由美子, 1994, 『リブとフェミニズム』(日本のフェミニズム 1)

- 岩波書店.
- 石井クンツ昌子, 2013, 『「育メン」現象の社会学——育児・子育て参加への希望を叶えるために』ミネルヴァ書房.
- 板橋亮平, 2013, 『ジョン・ロールズと現代社会——規範的構想の秩序化と理念』志學社.
- 板橋亮平, 2015, 『ジョン・ロールズと Political Liberalism』パレード.
- 板橋亮平, 2016, 『ジョン・ロールズと万民の法』パレード.
- 伊藤公雄, 1993, 『〈男らしさ〉のゆくえ——男性文化の文化社会』新陽社.
- 伊藤公雄, 1995, 「日本における男性運動の誕生と社会教育における男性学の可能性」『社会教育』14-7.
- 伊藤公雄, 1996, 『男性学入門』作品社.
- 伊藤公雄, 2002, 『「できない男」から「できる男」へ』小学館.
- 伊藤公雄, 2003a, 「学術の再点検——男性学・男性研究の視点から（特集 学術の再点検——ジェンダーの視点から（その2）」『学術の動向』日本学術協力財団, 8-4 (85) : 20-3.
- 伊藤公雄, 2003b, 『「男らしさ」という神話』NHK 人間講座.
- 伊藤公雄, 2004, 「メンズ・リブと歴史認識」『情況 第三期』5(10): 88-107.
- 伊藤公雄・牟田和恵偏, 1998, 『ジェンダーで学ぶ社会学』世界思想社.
- 伊藤公雄・海妻径子, 2004, 「メンズ・リブと歴史認識——近代の病としての男らしさ, その克服のために」『情況』, 5(10): 88-107.
- 伊藤公雄, 2009, 「男性学・男性性研究の過去・現在・未来」天野正子・伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代『男性学』（新編 日本のフェミニズム 12）岩波書店, 1-23.
- Jaggat Alison M., 1983, *Feminist Politics and Human Nature*, (Philosophy and Society), Rowman and Littlefield Publishers.
- 海妻径子, 2004a, 「〈運動〉と〈男性史〉のあいだ——メンズ・リブ, フェミニズム, そしてニューライト」『現代のエスプリ』(4).
- 海妻径子, 2004b, 『近代日本の父性論とジェンダー・ポリティクス』作品社.
- 金井淑子, 1989, 『ポストモダン・フェミニズム——差異と女性』勁草書房.
- 金井淑子・細谷実編, 2002, 『身体のエシックス/ポリティクス——倫理学とフェミニズムの交叉』ナカニシヤ出版.
- 金井淑子, 2006, 『ファミリー・トラブル——近代家族/ジェンダーのゆくえ』明石書店.
- 金井淑子, 2008, 『身体とアイデンティティ・トラブル——ジェンダー/セックスの二元論を超えて』明石書店.
- 金井淑子, 2011, 『依存と自立の倫理——「女/母」（わたし）の身体性から』ナカニシヤ出版.
- 金井淑子, 2013, 『倫理学とフェミニズム——ジェンダー, 身体, 他者をめぐるジレンマ』ナカニシヤ出版.

- 金井淑子・越智貢・川本隆史・高橋久一郎・中岡成文・丸山徳次・水谷雅彦編, 2004, 『岩波 応用倫理学講義 5 性/愛』岩波書店.
- 春日キスヨ, [1989] 2002, 『父子家庭を生きる——男と親の間』勁草書房.
- 加藤秀一, 1996, 「女性の自己決定権の擁護」江原由美子編『生殖技術とジェンダー』勁草書房.
- 加藤秀一, 1996, 『性現象論——差異とセクシュアリティの社会学』勁草書房.
- 加藤秀一・坂本佳鶴恵・瀬地山角編, 1993, 『フェミニズム・コレクションⅢ 理論』
- 葛生栄二郎, 2011, 『ケアと尊厳の倫理』法律文化社.
- 河合隼雄, 1997, 「『父性の復権』などできない」『文藝春秋』, 10: 262-268.
- 川本隆史, 1995, 『現代倫理学の冒険——社会倫理のネットワークキングへ』創文社.
- 川本隆史, 2005, 『Rawls 正義の原理』(現代思想の冒険者たち) 講談社.
- 川本隆史, 2004, 「ケアの倫理と制度——3 人のフェミニストを真剣に受け止めること」日本法哲学会編『法哲学年報——ジェンダーセクシュアリティと法』有斐閣.
- 川本隆史, 2008, 『共生から (双書 哲学塾)』岩波書店.
- 川本隆史編, 2005, 『ケアの社会倫理学——医療・看護・介護・教育をつなぐ』有斐閣.
- 川名はつ子・菊地潤・中村泉, 2000, 「出生前診断についての人びとの意識の現状」『日本保健福祉学会誌』7(1): 31-40.
- 河野美代子, 1999, 『さらば, 悲しみの性——高校生の性を考える』集英社文庫.
- Kearns, Deborah, 1983, “A Theory of Justice – and love: Rawls on the Family,” *Politics: Australian Journal of Political Science*, 18(2): 36-42.
- Key, E., 1914, *The Renaissance of Motherhood*, New York: G.P. Putnam’s Sons. (=1919, 平塚らいてう訳『母性の復興』新潮社.)
- Kimmel, M., 2000, *The Gendered Society*, Oxford University Press.
- Kimmel, M., Heamanda. J., Connell. W., eds., 2004, *Handbook of Stuedis on Men and Masculinities*, Sage Publications.
- Knijn and Kremer, 1997, “Gender and the Caring Dimension of Welfare States: Toward Inclusive Citizenship,” *Social Politics*, 4(3): 328-61.
- Kittay, E. F., 1995, “Taking Dependency Seriously: The Family and Medical Leave Act Consideraed in the light of the Social Organization of Work and Gender Equality,” *Hypatia*, 10(1): 30-48.
- Kittay, E. F., 1997, “Human Dependency and Rawlsian Equality,” Diana Tietjens Meyers ed., *Feminists Rethink the Self*, Westview Press
- Kittay, Eva Feder, 1999, *Love’s Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency*, New York: Routledge. (=2010, 岡野八代・牟田和恵監訳『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』白澤社.)
- Kittay, E. F., 2001, “When Caring Is Just and Justice Is Caring: Justice and Mental Retardation,” *Public Culture*, 13(3): 557-79.

- Kittay, E. F., 2002, "Love's Labor Revisited," *Hypatia*, 17(3): 237-50.
- Kohlberg, L., 1980, *Stage and Sequence; The Cognitive-Developmental Approach to Socialization*, Houghton Mifflin Co. (=1987, 永野重史監訳『道徳性の形成』新曜社.)
- Kohlberg, L., 1981, *The Philosophy of Moral Development*, San Francisco: Harper and Row Publishers.
- Kohlberg, L., 1984, *Essays on Moral Development, II: The Psychology of Moral Development*, New York: Harper and Row Publishers.
- 金野美奈子, 2016, 『ロールズと自由な社会のジェンダー——共生への対話』勁草書房.
- 厚生省大臣官房統計情報部編 1994 『統計情報部 報道発表資料』.
- 厚生省大臣官房統計情報部編 1994 『優性保護統計報告』.
- 工藤保則・西川知亨・山田容, 2016, 『〈オトコの育児〉の社会学——家族をめぐる喜びととまどい』ミネルヴァ書房.
- Kukathas and Pettit 1990, *RAWLS: A Theory of Justice and its Critics*, Cambridge: Polity Press. (= 1996, 山田八千子・嶋津格訳『ロールズ——『正義論』とその批判者たち』勁草書房.
- Kuhse, H., 1997, *Caring: Nurses, Women, and Ethics*, Oxford: Blackwell Publishers.
- Kymlicka, Will, 2002, *Contemporary Political Philosophy: An Introduction. 2nd edition*, Oxford University Press. (=2005, 千葉眞・岡崎晴輝 [訳者代表]『新版 現代政治理論』日本経済評論社)
- LaFleur, William R., 1994, *Liquid life*, Princeton Univ Pr; Reprint. (=2006, 森下直貴・遠藤幸英・清水邦彦・塚原久美訳『水子——〈中絶〉をめぐる日本文化の底流』青木書店.)
- Landau, Iddo, 1996, "How Androcentric is Western Philosophy?" *The Philosophical Quarterly*, 46(182): 48-59.
- Larabee, M.J., 1993, *An Ethic of Care: Feminist and Interdisciplinary Perspectives*, Routledge.
- Lawrence Walker, 1984, "Sex Differences in the Development of Moral Reasoning," *Child Development*, 55: 677-91
- LeVay, Simon., 1996, *Queer Science: The Use and Abuse of research into Homosexuality*, MIT Press. (=2002, 玉野真路・岡田太郎訳『クィア・サイエンス』勁草書房.)
- Lloyd, Sharon A., 1995, "Situating a Feminist Criticism of John Rawls's Political Liberalism," *Loyola of Los Angeles Law Review*, 28: 1319-1344.
- Marion Smiley, 2004, "Gender, Democratic Citizenship v. Patriarchy: A Feminist Perspective on Rawls," *Fordham Law Review*, 72(5): 1599-1627.
- McFadden, M, 1984, "Anatomy of difference: Toward a classification of feminist theory," *Women's Studies International Forum*, 7(6): 495-504
- Mallon, Ron, 1999, "Political Liberalism, Cultural Membership, and the Family," *Social Theory and Practice*, 25(2): 271-97.
- Marquis, Don, 1989, "Why Abortion Is Immoral," *The Journal of Philosophy*, 86(4).

- 松本彩子, 2005, 『ピルはなぜ歓迎されないのか』 勁草書房.
- 松岡悦子, 1987, 「出産にかかわる男たち」『現代思想』, 15(12): 194-123.
- Mayeroff, M., 1971, *On Caring*, New York: Harper and Row Publishers. (=1987, 田村真・向野宣之訳『ケアの本質——生きることの意味』 ゆみる出版.)
- McGrady, M., 1975, *My Life as a Househusband*, The Kitchen Sink Papers (=1983(1995), 伊丹十三訳『主夫としての私の生活』 女性文庫.)
- Messner, M. A., 1997, *Politics of Masculinities: Men in Movements*, Sage Publication.
- 三井さよ, 2004, 『ケアの社会学——臨床現場との対話』 勁草書房.
- McClain, Linda C., 1991-92, “‘Atomistic Man’ Revisited: Liberalism, Connection, and Feminist Jurisprudence,” *Southern California Law Review*, 65: 1173-1264.
- Minow, M., 1990, *Making All the Difference*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Mitchell, Uuliet, 1975, *Psychoanalysis and feminism*, London: Kern Associates. (=1977, 上田昊訳『精神分析と女の解放』 合同出版.)
- Millet, Kate, 1970, *Sexual Politics*, New York: Doubleday (1977, Virago). (=1973, 藤枝濤子他訳『性の政治学』 自由国民社 (1985, ドメス出版)
- 宮地尚子, 1998, 「孕ませる性と孕む性——避妊責任の実体化の可能性を探る」『現代文明学研究第一号』, 1: 19-29.
- 溝口明代・佐伯洋子・三木章子, 1994, 『資料 日本のウーマン・リブ史Ⅱ 1972-1975』 松香堂.
- 水田珠枝, 1994, 『女性解放思想史』 筑摩書房.
- Monique Deveaux, 1995, “Shifting aradigms: Tehorizing Care and Justice in Political Theory,” *Hypatia*, 10(2): 116.
- Morgen and King, 2001, “Why Have Children in the 21st Century? Biological Predisposition, Social Coercion, Rational Choice,” *pulation / Revue européenne de Démographie*, 17(1): 3–20.
- 森村修, 2000, 『ケアの倫理』 大修館書店.
- Money J. and Tucker P., 1975, *Sexual Signatures on Being a Man or a Woman*. (=1979, 朝山新一・朝山春江・耿吉訳『性の署名——問い直される男と女の意味』 人文書院.)
- Moody-Adams, Michele M., 1991, “Gender and the Complexity of moral Voices,” Claudia Card, Lawrence ed., *Feminist Ethics*, University Press of Kansas.
- Moore, D., and Leafgren, F, 1990, *Men in Conflict*, American Association for
- 森岡正博, 1994, 『生命観を問いなおす——エコロジーから脳死まで』 ちくま新書.
- 森岡正博, 1999, 「女性学からの問いかけを男性はどう受け止めるべきなのか」『日本倫理学会第50回大会報告集』, 52-87.
- 森岡正博 2001 『生命学に何ができるか』 勁草書房.
- 森岡正博 2005 『感じない男』 ちくま書房.
- 森岡正博 2008 「膣内射精性暴力論の射程——男性学から見たセクシュアリティと倫理」『倫

- 理学研究』第38号関西倫理学会(38): 24-33.
- Munoz-Dardee, Veeronique, 1998, "Rawls, Justice in the Family, and Justice of the Family," *Philosophical Quarterly*, 48(192): 335-52.
- 村瀬春樹, 1984, 『怪傑！ハウス・ハズバンド』 晶文社.
- 牟田和恵, 2007, 「『ジェンダー家族』のポリティクス——『親性』の男女平等主義を再考する」日本家族社会学会テーマセッション報告原稿.
- 牟田和恵編, [2009] 2012, 『家族を越える社会学——新たな生の基盤を求めて』新曜社.
- 仲正昌樹, 213 『いまこそロールズに学べ——「正義」とはなにか?』春秋社.
- 中西正司・上野千鶴子, 2003, 『当事者主権』岩波書店.
- Nancy Fraser, 1997, *Justice Interruptus: Critical Reflections on the "Postsocialist" Condition*, Routledge. (=2003, 仲正昌樹監訳『中断された正義——「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』御茶の水書房.)
- 西川祐子・荻野美穂編, 1999, 『共同研究 男性論』人文書院.
- 西川祐子, 2000, 『近代国家と家族モデル』吉川弘文館.
- Noddings, N., 1984, *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*, university of California Press. (=1997, 立山善康ほか訳『ケアリング：倫理と道徳の教育——女性の観点から』晃洋書房.)
- Noddings, Nel, 2002, *Starting at Home: Caring and Social Policy*, Berkley: University of California Press.
- Noonan, John T., Jr., 1970, "An Almost Absolute Value in History," John T. Noonan, Jr. ed., *The Morality of Abortion: Legal and Historical Perspectives*, Harvard University Press.
- Norgren, Tiana, 2001, *Abortion before Birth Control: The Politics of Reproduction in Postwar Japan*, Princeton University Press. (=2008, 岩本美砂子監訳『中絶と避妊の政治学——戦後日本のリプロダクション政策』青木書店.)
- Nozick, Robert, 1974, *Anarchy, State and Utopia*, New York: Basic Books, Inc., Publishers. (=1985, 島津格訳『アナーキー・国家・ユートピア』木鐸社.)
- NPO 法人 Wink 編, 2010, 『養育費を実態調査 払わない親の本音——アンケートとインタビュー 離婚・未婚の父・母・子どもたちの声』日本加除出版.
- Nussbaum, M., 1992, "Justice for Women!" *The New York Review of Books*, October 8: 43-48. (=1993, 川本隆史訳「女たちに正義を！——スーザン・M・オーキン『正義・ジェンダー・家族』のために」みずす書房.)
- Nussbaum, Marthe, 2003, "Rawls and Feminism," *The Cambridge Companion to Rawls*, Cambridge: Cambridge University Press, 488-520.
- 永田えり子, 1997, 『道徳派フェミニスト宣言』勁草書房.
- 永田えり子, 2001, 「『性的自己決定権』批判——リバータリアニズム VS フェミニズム」江原由美子編『フェミニズムとリベラリズム』, 143-78.

- Norgren, Tiana, 2001, *Abortion before Birth Control: The Politics of Reproduction in Postwar Japan*, Princeton University Press. (=2008, 岩本美砂子監訳『中絶と避妊の政治学——戦後日本のリプロダクション政策』青木書店.)
- 沼崎一郎 1997「〈孕ませる性〉の自己責任——中絶・避妊から問う男の性倫理」『IMPACTION インパクション 105 特集 ピルから見る世界』(105) : 86-96.
- 沼崎一郎, 2000a, 「男性にとってのリプロダクティブ・ヘルス/ライツ——〈孕ませる性〉の義務と権利」(〈テーマ〉女性と人権)『国立婦人教育会館研究紀要』, 4: 15-23.
- 沼崎一郎, 2000b, 「マスターベーションの政治経済学——女性を“道具化”する男性セクシュアリティの個人的形成」『アディクションと家族』17(4): 377-82.
- 中村直美, 2007, 『パターンリズムの研究』成文堂.
- 内閣府政策統括官(共生社会政策担当), 2006, 「少子化社会に関する国際意識調査」報告書
- 野崎綾子, 2003, 『正義・家族・法の構造変換——リベラル・フェミニズムの再定位』勁草書房.
- 荻野美穂, 1988, 「性差の歴史学——女性史の再生のために」『思想』, (768) : 73-96.
- 荻野美穂, 1994, 『生殖の政治学——フェミニズムとバース・コントロール』山川出版社.
- 荻野美穂, 2001, 『中絶論争とアメリカ社会——身体をめぐる戦争』岩波書店.
- 荻野美穂, 2002, 『ジェンダー化される身体』勁草書房.
- 荻野美穂, 2008, 『「家族計画」への道——近代日本の生殖をめぐる政治』岩波書店.
- 重田園江, 2013, 『社会契約論——ホップズ, ヒューム, ルソー, ロールズ』ちくま新書.
- 岡野八代, 2009, 『シティズンシップの政治学——国民・国家主義批判〔増補版〕』白澤社.
- 岡野八代, 2012, 『フェミニズムの政治学——ケアの倫理をグローバル社会へ』みすず書房.
- Okin, Susan M., 1979, *Women in Western Political Thought*, Princeton Univ Pr; Reissue. (=2010, 田林葉・重森臣広訳『政治思想のなかの女——その西洋的伝統』晃洋書房.
- Okin S. M., 1989a, *Justice, Gender, and the Family*, Basic Books. (=2013, 山根純佳・内藤準・久保田裕之『正義・ジェンダー・家族』岩波書店.)
- Okin, Susan Moller, 1989b, “Reason and Feeling in Thinking about Justice” *Ethics* 99: 229-249.
- Okin, Susan M., 2004, “Justice and Gender: An Unfinished Debate,” *Fordham Law Review*, 72(5): 1537-67.
- 大東貢生・井上未来, 2005, 「男性運動グループの活動と課題——中間報告」『仏大社会学』(30) : 67-71. (再掲 2009『新編 日本のフェミニズム 12 男性学』岩波書店.)
- 大山治彦, 大東貢生, 1999, 「日本の男性運動のあゆみ(1)——〈メンズ・リブ〉の誕生」『日本ジェンダー研究』, (2) : 43-55. (再掲, 2009『新編 日本のフェミニズム 12 男性学』岩波書店)
- 男の子育てを考える会編, 1978, 『現代の子育て考 IV』現代書館.
- Pateman, C., 1989, *The Sexual Contract*, Stanford, CA: Stanford University Press.

- Phillips, A., ed., 1987, *Feminism and Equality: Reading in Social and Political Theory*, New York: New York University Press.
- Rawls, J., 1971, *A Theory of Justice*, Cambridge, MA: Harvard University Press. (=1986, 矢島欽次監訳『正義論』紀伊国屋書店. / =2010, 川本隆史, 福間聡, 神島祐子訳『正義論改訂版』紀伊国屋書店)
- Rawls, J., 1993, *Political liberalism*, Columbia University Press.
- Rawls, J., 1997, "The Idea of Public Reason Revisited," *The university of Chicago Law Review*, 64(3): 765-807.
- Rawls, J., 2001, *Justice as Fairness: A Restatement*, Erin Kelly ed., Cambridge: Belknap Press. (=2004, 田中成明・亀本洋・平井亮輔訳『公正としての正義 再説』岩波書店.)
- Rddick, Sara, 1989, *Maternal Thinking: Toward a politics of Peace*, Boston: Beacon Press.,
- Reich, W. T., 1995, "History of the Notion of Care," Reich, Warren Thomas, ed., "Encyclopedia of Bioethics 3rd Edition," Macmillian Reference USA. (=2007, 生命倫理百科事典翻訳委員会編『生命倫理百科事典』丸善.)
- Reilly, E., 1998, "The Jurisprudence of Doubt': How the Premises of the Supreme Court's Abortion Jurisprudence Undermine Procreative Liberty," *Journal of Law and Politics*, 757.
- Sandel, Michael J., 1998, *Liberalism and the Limits of Justice, 2ed*, Cambridge University Press. (=2009, 菊池理夫『リベラリズムと正義の限界 原著第2版』勁草書房.)
- 齋藤美奈子, 1997, 『妊娠小説』ちくま文庫.
- 齋藤圭介, 2009, 「男性学の生殖論における臨界——再生産責任の帰責主体をめぐる議論を中心に」『ソシオロギス』33: 40-55.
- 齋藤純一編, 2003, 『親密圏のポリティックス』ナカニシヤ出版.
- 齋藤有紀子編, 2002, 『母体保護法とわたしたち——中絶・多胎減数・不妊手術をめぐる制度と社会』明石書店.
- 坂井律子・春日真人, 2004, 『つくられる命——AID・卵子提供・クローン技術』NHK 出版.
- 坂本桂鶴恵, 1993, 「解題 男の解放」加藤秀一・坂本桂鶴恵・瀬地山角編『フェミニズム・コレクション III 理論』勁草書房, 342-47.
- Sandel, M. J., 1982, *Liberalism and the Limits of Justice*, Cambridge University Press. (1992, 菊池理夫訳『自由主義と正義の限界』三嶺書房.)
- 沢山美果子, 1998, 『出産と身体の近世』勁草書房.
- 沢村美果子, 2005, 『性と生殖の近世』勁草書房.
- Schwartzman, Lisa H. 2006, *Challenging Liberalism: Feminism as Political Critique*, University Park: Pennsylvania State University Press.
- Scott, Joan W., 1988, *Gender and the Politics of History*, New York: Columbia University Press. (=1992, 荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』平凡社.)
- 瀬地山角, 1990, 「家父長制をめぐる」江原由美子編『フェミニズム論争——70年代から

- 90年代へ』勁草書房.
- 瀬地山角, 1993, 「達成のかなたへ——フェミニズムはもう古いか」『フェミニズム・コレクション』I, 勁草書房, 361-90.
- 瀬地山角, 1996, 『東アジアの家父長制——ジェンダーの比較社会学』勁草書房.
- 盛山和夫, 2006, 『リベラリズムとは何か Rawls と正義の論理』勁草書房.
- Sen, Amartya, 1992, *Inequality Reexamined*, (=1999, 池本幸雄・野上祐生・佐藤仁『不平等の再検討』岩波書店.)
- 千田有紀, 1999, 「家父長制の系譜学 (特集 ジェンダー・スタディーズ)」『現代思想』, 27(1): 197-209.
- 千田有紀, 2011, 『日本型近代家族——どこから来てどこへ行くのか』勁草書房.
- 品川哲彦, 2007, 『正義と境を接するもの——責任という原理とケアの倫理』ナカニシヤ出版.
- Shanley, M. L., and U. Narayan eds., *Reconstructing Political Theory: Feminist Perspectives*, Cambridge: polity Press.
- Sherwin Susan, 1992, *No Longer Patient: Feminist Ethics and health Care*, Philadelphia: Temple University press.
- Sherwin, Susan, 1991, "Abortion Through a Feminist Ethics Lens," *Dialogue*, Vol. XXX.
- 下夷美幸, 2008, 『養育費政策にみる国家と家族——母子世帯の社会学』勁草書房.
- 下夷美幸, 2015, 『養育費政策の源流——家庭裁判所における履行確保制度の制定過程』法律文化社.
- Sokoloff, Natalie, 1980, *Between money and love: the dialectics of women's home and market work*, New York: Praeger publishers. (1987, 江原由美子他訳『お金と愛情の間——マルクス主義フェミニズムの展開』勁草書房.)
- Stephen Mulhall and Adam Swift, 1996, *Liberals and Communitarians*, Wiley-Blackwell. (=2007, 谷澤正嗣・飯島昇蔵ほか訳『リベラル・コミュニタリアン論争』勁草書房.)
- 多賀太, 2002, 「男性学・男性研究の潮流」『日本ジェンダー研究』, (5): 1-4.
- 多賀太, 2006, 『男らしさの社会学——揺らぐ男のライフコース』世界思想社.
- 高橋準, 1999, 「生殖 Procreation」木本貴美子・高橋準監訳『フェミニズム理論辞典』明石書店, 252-3.
- 竹村和子編, 2003, 『“ポスト”フェミニズム』(知の攻略10) 作品社.
- 田間泰子, 2001, 『母性愛という制度』勁草書房.
- 田間泰子, 2006 『「近代家族」とボディ・ポリティクス』世界思想社.
- 田中俊之, 2004, 「「男性問題」としての不妊」村岡潔・西村理恵・白井千晶・田中俊之・岩崎皓『不妊と男性』青弓社.
- 田中俊之, 2009, 『男性学の新展開』青弓者.
- 田中俊之, 2016, 『男が働かない, いいじゃないか!』講談社.

- 田中美津, [1972]2004, 『増補版 いのちの女たちへ——取り乱しウーマン・リブ論』 パンドラ.
- 谷口和憲, 1997, 『性を買う男』 パンドラ.
- 立岩真也, 1992, 「出生前診断・選択的中絶をどう考えるか」 江原由美子編『フェミニズムの主張』 勁草書房, 167-202.
- 立岩真也, 1997, 『私的所有論』 勁草書房.
- Thomson, Judith Jarvis, 1971, "A Defense of Abortion," *Philosophy & Public Affairs*, 1(1).
- Tong, Rosemarie, 1998, *Feminist Thought, 2nd edition*, Boulder, CO: Westview Press.
- Tooley, Michael, 1972, "Abortion and Infanticide," *Philosophy & Public Affairs*, 2(1).
- Tront, Joan, 1987, "Beyond Gender Difference to a Theory of Care," *Signs*, 12(4): 141-9.
- Tronto, Joan C., 1993, *Moral Boundaries: A Political Argument for an Ethic of Care*, Routledge.
- Trout, Lara M., 1994, "Can Justice as Fairness Accommodate Diversity? An Examination of the Representation of Minorities and Women in A Theory of Justice," *Philosophy in the Contemporary World*, 1 (3): 39-45.
- 柘植あづみ, 1996, 「『不妊治療』をめぐるフェミニズムの言説再考」 江原由美子編『生殖技術とジェンダー』 勁草書房.
- 柘植あづみ, 2012, 『生殖技術——不妊治療と再生医療は社会に何をもたらすか』 みすず書房.
- 塚原久美, 2014, 『中絶技術とリプロダクティヴ・ライツ——フェミニスト倫理の視点から』 勁草書房.
- 薦森樹編, 1999, 『はじめて語るメンズ・リブ批評』 東京書籍.
- 上村くにこ, 1988, 『性の崩壊』 フォーユー.
- 上野千鶴子, 1985, 『構造主義の冒険』 勁草書房.
- 上野千鶴子, 1986a, 「女性学とは何か」 山村嘉己・大越愛子『女と男のかんけい学』 明石書店, 1-22.
- 上野千鶴子, 1986-88, 「マルクス主義フェミニズム (14回連載)」『思想の科学』 74-98.
- 上野千鶴子, 1989, 「メンズ・リブが必要だ」『現代思想』, 17(10): 38-53.
- 上野千鶴子, 1990, 『家父長制と資本制』, 岩波書店.
- 上野千鶴子, 1994 『近代家族の成立と終焉』 岩波書店.
- 上野千鶴子, 1995, 「「オヤジ」になりたくないキミのためのメンズ・リブのすすめ」 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編『男性学』(日本のフェミニズム別冊) 岩波書店, 1-33.
- 上野千鶴子, 2002, 『差異の政治学』 岩波書店.
- 上野千鶴子, 2003, 「解説」 Finema, Marthea A., 1995, *The Neutered Mother, the Sexual Family and Other Twentieth Century Tragedies*, Routledge. (=2003, 上野千鶴子監訳, 速水葉子・穂田信子訳『家族積みすぎた方舟——ポスト平等主義のフェミニズム法理論』 学陽書房.)
- 上野千鶴子, 2006, 「ジェンダー研究の変遷と男性学の可能性」『ドレストァディ』 49: 4-9.

- 上野千鶴子, 2011a, 『ケアの社会学——当事者主権の福祉社会へ』太田出版.
- 上野千鶴子編, 2001b, 『構築主義とは何か』勁草書房.
- 上野千鶴子, キース・ビンセント, 河口和也, 1998, 「ゲイ・スタディーズ ミーツ フェミニズム——東京大学・五月祭シンポジウム録」風間孝, 河口和也, キース・ヴィンセント『実践するセクシュアリティ——同性愛・異性愛の政治学』動くゲイとレズビアンの会, 25-64.
- 上野千鶴子, 伊藤公雄, 蔦森樹, 1999, 「はじめて語る メンズリブ批評 座談会」蔦森樹編『はじめて語るメンズリブ批評』東京書籍.
- 上野千鶴子・金塚貞文, 1987, 「オナニズムの出口なし」『現代思想』青土社 15(12): 130-147.
- Warren, Mary Anne, 1973, "The Moral and Legal Status of Abortion," *The Monist*, 57.
- 渡辺幹雄, [1998] 2012, 『Rawls 正義論の行方——その全体系の批判的考察 [増補版]』春秋社.
- 渡辺幹雄, 2012, 『ロールズ正義論再説——その問題と変遷の各論的考察』春秋社.
- Weithman, Paul, 2010, *Why Political Liberalism?: On John Rawls's Political Trun*, Oxford: OxfordUniversity press.
- West, R., 1990, "Foreword: Taking Freedom Seriously," *Harvard LR*, 104(43).
- Wijze, Stephen de, 2000, "The Family and Political Justice: The Case for Political Liberalism," *Journal of Ethics*, 4: 257-82.
- 山田昌弘, 2009, 「家族のオルタナティブは可能か？」牟田和恵編『家族を越える社会学——新たな生の基盤を求めて』新曜社, 202-207.
- 山岸明子, 1987, 「付論 コールバーグ理論の新しい展開——主として Gilligan の批判をめぐって」『道徳性の形成』新曜社.
- 山根純佳, 2003, 「リベラリズムの臨界——中絶の自己決定権をめぐって——」『思想』, 947: 21-40.
- 山根純佳, 2004, 『産む産まないは女性の権利か』勁草書房.
- 山根純佳, 2010, 『なぜ女性はケア労働をするのか——性別分業の再生産を超えて』勁草書房.
- 山根純佳, 2015, 「ケア労働の公正分配としての両立支援」第 88 回日本社会学会大会
- 安井絢子, 2010, 「ケアとは何か——メイヤロフギリガンノディングスにとっての「ケア」」『哲学論集』37 別冊 119-30.
- 吉沢夏子, 1993, 『フェミニズムの困難——どういふ社会が平等な社会か』勁草書房.
- Young, Iris, 1997, *Intersecting Voices: Dilemmas of Gender, Political Philosophy and Policy*, Princeton University Press.
- Yuracko, Kimberly A., 1995, "Towards Feminist Perfectionism: A Radical Critique of Rawlsian Liberalism," *UCLA Women's Law Journal* 6: 1-48.

論文の内容の要旨

論文題目 〈生殖と男性〉の社会学——ジェンダー理論における平等論・再考

氏名 齋藤圭介

本稿の目的は、〈生殖〉と〈男性〉というこれまで積極的には結びつけられてこなかった2つの単語を併記し、そこから新たな問題設定や分析枠組みを構築する作業をとおして、ジェンダー研究という実践を総体的に問い直すことである。こうした試みが位置づけられる背景として、生殖をめぐる男女の身体差の圧倒的不平等を前提として、いかなる平等観に基づき望ましい社会を構想すべきかという問題意識がある。

男女の生殖機能やそれに関連する経験は、いまのところ男女のあいだで代替不可能であり、非対称性がある。生殖において男女が非対称である、あるいはそうした不平等な状態を平等に近づけるべきだ、といった主張には、なんらかの尺度や基準が前提とされている。そうした（不）平等の度合いをはかる尺度や基準は、各論者が有する理想的な社会構想を目指すための指針に基づいて作成されている。しかし、生殖における男女平等が達成されたと判断するに足る尺度や基準は複数ありえ、そして相互に鋭く対立することがある。では、生殖を論じてきた先行研究がいかなる社会構想のもと、どのような尺度や基準を用いて生殖における（不）平等を論じてきたのか、そして、先行研究の議論の変遷を踏まえ、わたしたちはいかなる望ましい社会構想のもとに、どのような尺度や基準を用いて生殖における男女平等を検討すればよいのか——これが本稿の問いである。

本稿は3部構成であり、序を含め11章からなる。第1部はフェミニズム思想を中心とする先行研究における生殖論を検討し、第2部は生殖における男性という存在を男性学・男性運動という分野から検討し、そして第3部は生殖における男女の平等をどのように考えるべきかについて規範的社会理論の立場から検討する。いわば第1部と第2部は既存の研究領域での生殖と男性の関係を批判的に検討することに費やされ、本稿の中心的な議論となる第3部では、現代のリベラリズム思想を中心とする規範理論と、フェミニズム思想を中心とするジェンダーの規範理論との対話（不）可能性を、規範的社会理論の立場から探求するという構成になっている。

以下、各部・各章ごとの議論を紹介する。

まず第1部は、2つの章から構成される。第1章では、本稿全体の問題関心や概念の定義について確認をしたのち、これまでの生殖における男女平等について言及している研究潮流として、とくにフェミニズム理論の展開を対象に整理した。具体的には、フェミニズム思想の生殖論において、家父長制と自己決定権の2つの概念が与えた影響を考察した。また生殖が女性の問題として論じられがちである状況を踏まえ、生殖論においてなぜ男性を当事者と考える必要があるのか、男性を生殖の当事者として位置づける根拠は何であるか

について検討した。

第2章では、フェミニズム思想について、生殖をめぐりいかなる議論が展開されてきたのかを歴史的に遡り検討した。フェミニズム思想の男女平等観の変遷を追いながら、同時にその生殖論に登場する男性の位置づけの変遷を考察した。そして、そうした生殖論に男性が積極的には登場してこなかったことを指摘した。

第1部で明らかにしたのは、生殖における男女平等というこれまでの議論において、そこで議論の対象とされているのは女性のみである、という事実である。それを踏まえ、男性も生殖の当事者の一人として位置づける必然性の説明を行った。

つづく第2部では、男女のもう一方の男性は、生殖について何を語ってきたのか、あるいは何も語っていないのであればそれはなぜなのか、について検討をする。第1部で生殖における男性の不在を明らかにしたが、男性の生殖の当事者としての意識の希薄さはなぜなのかが次なる問いとなる。そこで日本の男性学・男性運動という立場から考察を行い、男性は生殖においてどのような存在として自分（男性）を位置付けてきたのかを経験的に検討した。

第2部も2つの章から構成される。3章では、日本における男女平等の実態について各種統計資料から確認をする。また、出産後の生殖と男性、つまり養育と男性の問題を扱う。現代日本において、生殖行為の責任の1つの取り方として、男性は子を養育する義務を負うという認識は——その責任の取り方には幅があるとはいえ——規範の水準では広く共有されている。しかし各種統計データが示す実態は、そうした規範と大きく食い違っている。また、公的扶養による税金の支出を減らすために私的扶養が強調される昨今の社会状況を鑑みると、男性の養育責任はますます強くなってきている。子どもの福祉の観点からも、生殖と男性の問題は捉えなおされる必要があるとして、福祉政策とも接続する重要な問いであることを指摘した。

4章では、生殖の当事者は誰か——あるいは「生殖の当事者は誰か」と考えることはいかなることを意味するのか——という問題について検討をした。そのうえで、男性と生殖という問題系に取り組んだ男性学の議論を紹介しながら、生殖における男女平等という議論において、男性は自身に都合よく不十分なかたちで、他者（女性）の問題として生殖を論じてきたという事実を確認した。

第2部で明らかにしたのは、男性にとって生殖は他者（女性）の問題と捉えられてきたこと、また他方で生殖を論じる一部の男性にはパターンリズムと批判が寄せられ、生殖は男性にとって論じにくい主題となってしまうことを指摘した。

第1部と2部で行った女性と男性の生殖についての経験的な語りを踏まえ、第3部では、理論的な検討を行った。具体的には、フェミニズム思想の規範理論をより広い理論的文脈に置き直し、1つの男女平等観を提示している社会規範理論として位置づけ直した。第3部では、フェミニズムの規範理論とその他の規範理論との対話可能性を探ることから、生殖における圧倒的非対称性を前提とした男女平等の望ましい考え方を構築するというアプロ

一ちを採用した。

第3部は5章から構成される。第5章では、現在の公共哲学や規範理論の参照点としてもっとも相応しいJ. Rawlsの『正義論』と『政治的リベラリズム』を主たる対象に、男女平等がいかように考えられているのかについて確認をした。そのさい、Rawlsの議論を実質的な平等観を提示しているものとして、そこで提示される「よい社会」の内実を含め検討した。

つづく第6章から9章は、フェミニズム思想の規範理論を取り上げた。とくに本稿が目にしたのは、ケアという概念を軸に展開しているフェミニズム思想の潮流における平等観と、その含意である。6章ではフェミニズムの規範理論の大きな潮流を概観し、とくに現代リベラリズムとの対立の文脈を重視して整理した。7章では、フェミニズムの規範理論の中心といえるケアをめぐる思想潮流について、論者の世代という切口から詳述した。8章ではケアの議論をさらに展開しているフェミニズム理論を掘り下げて検討し、現代のリベラリズムとの対立点と妥協点を提示した。9章では、Rawlsの議論が前提としている各論点を、フェミニズムのケア論がいかにか乗り越えているのか／乗り越えていないのか、について本稿なりの評価をした。

第3部を通して検討したのは、社会構想の指針として、私的領域で適用されていた規範であるケアという論点が、どこまで公的領域に適合・拡張できるのかについてである。ひいては生殖における男女平等をいかように考えるべきなのか、といった規範的な問題に対する解に、どこまでフェミニズムの規範理論は応えられているのかを評価することでもある。

以上の第1部から第3部までの議論を通して、本稿の結論では、これまでの議論を振り返りながら、生殖における男女平等の規範的な解をめぐる検討に費やされる。生殖の男女平等のためには、公的領域への女性の参加はもとより、私的領域への男性の参加を促すことが肝要であることを本稿は主張した。そのため、本稿は、男性を私的領域に積極的に参加させる方向に社会の舵を切るべきだ、という立場を擁護した。こうした本稿の立場は、生殖を女性個人の問題として組み立てられるという議論にたいして修正を迫るものであり、また同時に生殖は他人（女性）の問題としてかかわろうとしない男性にも、修正を迫るものとなる。

こうした社会モデルは、規範的な社会像が有するカップル幻想、異性愛主義、あるいは近代家族規範といった陥穽には十分な目配りをしつつも、生殖という協働的な冒険的企てに向けて進んでいこうとする男女にとって、男女双方から望ましいと思える生殖をめぐるパートナーシップを築くための規範的な原理として、提出される。